定年退職教授紹介

岩間 徹 教授を送る

今 井　宏

岩間 徹 教授は，1982年3月，定年で本学を御退職になった。その御在職は，東京女子大学が新制大学として発足したばかりの1950年4月，西洋史担当の文学部助教授に御就任になって以来のことであるから，32年の長きにわたって本学の教壇に立たれたことになる。一口に三十有余年というが，この歳月のもつ重みは簡単に言葉では表現しきれない。教授の所属された機構面からみても，御就任の当初は社会科学科であったが，1961年からは独立して史学科となった。また1966年に牟礼に新キャンパスを求めて短期大学部が再発足した際には，準備委員のひとりとして新しい構想に立つ教養科のプログラムづくりに参画された責任をとられて，短期大学部に移られた。そのけじめのつけかたのきびしさに，驚嘆を禁じえなかった日々のことが，今なお鮮かに脳裏に蘇ってくる。短期大学部の必ずしも恵まれたものとはいえない環境のもとでの御苦労は，教授が必要以上のものは何も話されないお人柄であるだけに，想像に余りあるものであった。1971年に文理学部にお帰りになってからは，史学科主任として大学院史学専攻の修士課程の開設に尽力された。

教授の御専攻は，西洋史学のなかでも近代ロシア史である。わが国の西洋史学は比較的若い学問であって，本格的な展開をみたのは第2次大戦が敗戦に終ったのちのことであるといってもほぼ誤りではないであろう。いわば昭和に入ってファシズムの暗雲が立ちこめてきた時期に大学生生活を送られた，岩間教授と同じ世代の方々が，この若い学問の展開の起動力となられた。なかでもロシアといえばすぐに「赤化」思想と結びつけられるような重苦しい雰囲気のなかで，教授はロシア史研究の開拓者となられたのであった。この辺の事情は，教授の御退職を記念して刊行された『史論』第35号の座談会「往時茫茫」において，教授御自身の口を通して語られている。さて本学に御就任後の1955年から1年半にわたってロックフェラー財団研究員としてアメリカ合衆国コロンビア大学ロシア研究所で西欧圏のロシア史研究の精髄にふれられたことは，教授の研究生活に明らかに転機をもたらしたものと推察される。留学から帰られてから岩間教授は，本学の他に北海道大学法学部に新設されたスラブ研究施設，東京大学文学部，東京教育大学などで非常勤として教鞭をとられ，今日のわが国のロシア史研究を支えておられる方々に強い影響を残された。ことを東京女子大学に限っていえば，ロシア語が第二外国語としても認められておらず，また正規の授業とてない

カリキュラムがつづいているにもかかわらず，毎年かならず数人の学生がロシア史の専攻を希望し，卒業論文を書いているのは，他の大学を見まわしてみてもおよそ類例のないことであって，ひとえに教授の薫陶よろしきをえた賜物である。それにしてもわざわざ課外授業の時間をつくられて，ロシア語を初歩から手ほどきされている御苦労には，いつも頭の下がる想いであった。

教授の御業績としては，大学御卒業のすぐあとに大類伸先生のお名前で刊行された『列強現勢史ロシア』をはじめ，多数の著書・論文がある。なかでも学界に波紋を投げかけたのは，1970年に刊行された『ロシア革命とソ連邦の成立』(至文堂)であった。ロシア革命を歴史的必然の産物とみて，その勝利をひたすら肯定的に評価する一般的な風潮をよそに，教授はロシアのインテリゲンツィアと大衆を分ける底知れぬ深さの断層に着目され，ロシア史に内蔵された他の可能性を探って，硬直した歴史観に遠まわしの批判を加えられたからである。しかし教授御自身はこの書物よりも，『プーシキン——詩人と革命家の間』(誠文堂新光社）ならびにその発展としての『プーシキンとデカブリスト』(同社）の方を愛されているようである。いかにも青年期におけるロシア文学の耽読から出発された歴史家としての教授の肌合いをうかがい知ることができよう。しかも教授は，ヨーロッパとりわけロシアの文化をこよなく愛されると同時に，東洋の古典にも親しまれ，謡曲をたしなまれ，また句会にも精勤される，文字どおりの「教養人」である。学問の専門分化がとめどもなく進行している今日，教授のごとき幅広くしかも奥行きの深い識見の持ち主は，今後は現われないのではないかとの想いしきりである。およそすぐれた歴史家がそなえねばならない要件は，豊かな学問の蓄積に支えられた細部への眼くばりとともに，対象の本質の大胆な摘出にあると考えられるが，毎学年末に御一緒した卒業論文口述試験の席上で，良きにつけ悪しきにつけ，その論文の本質を一言のもとで批判される鮮かさには，何度も舌をまいたことであった。「人類の生み育てた文化遺産をいつくしみ，探求心に溢れた眼の輝きをもった学生を，ひとりでも多く世にだしたい」というのが，岩間教授の日ごろの口ぐせであった。微力ではあるが，この目標の達成にむけて努力するのをお約束して，敬愛する岩間教授をお送りすることにしたい。

（付記） なお「東京女子大学学会」は，まだ物質も乏しく，研究条件も劣悪をきわめた時期に，本学にアカデミックな雰囲気をいっそう高めようとして，岩間教授が若い方々と語り合われたのが，創立のきっかけであったと聞いている。教授は1956年から1961年まで，この学会の初代委員長をつとめられて，今日の基礎をかためられた。この学会の目的や運営方法などをめぐって，さまざまな議論が交わされている今日，創設期の事情をこの際再確認しておくことが必要ではないだろうか。